

# Nara Women's University

## VI シンポジウム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学文学部附属幼稚園 公開日: 2010-11-18 キーワード (Ja): 運動遊び, 幼児教育 キーワード (En): 作成者: 奈良女子大学文学部附属幼稚園, 丹羽, 劭昭, 永野, 重史, 近藤, 充夫, 藤原, 愛子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10935/2509">http://hdl.handle.net/10935/2509</a>

## VI シンポジウム

主 題 「これからの幼児教育における運動遊び」

司 会 奈良女子大学文学部附属幼稚園園長

丹 羽 劭 昭

講 師 国立教育研究所第3研究部部長

永 野 重 史 先 生

東京学芸大学教育学部助教授

近 藤 充 夫 先 生

京都教育大学教育学部附属幼稚園副園長

藤 原 愛 子 先 生

## 司会（丹羽）

只今から「これからの幼児教育と運動遊び」というテーマでシンポジウムをやらせて頂きたいと思  
います。お休み時間が大変短うございまして、お茶をのんびりする時間もあまりなく、大変恐縮に存  
じます。また、お疲れのところ申し訳ございませんが、予定通りに4時半に終わらせたいと考えておりま  
すので御協力頂きたいと思ひます。最初に私の方からこうしたテーマを設定しました理由を申し上げ、  
そのあと講師の先生方のご紹介をさせていただきます。

さて、「これからの幼児教育と運動遊び」というテーマを設定したのは、何となくこんなふう  
なことだからというようなことを申し上げてみたいと思ひます。私、幼稚園の方は全く素人でござい  
ます。幼稚園に関係しまして2年半位しかたっておりません。したがってアマチュアの発想と申しま  
しょうか、小学校以後のいわゆる公教育機関という立場から幼稚園のあり方を考えてしまいがちで  
ございます。こんどの場合もそうでございまして、学校というのはおそらく家庭とか地域社会で営まれ  
ている自然な教育機能では達成し得ないような、教育機能を、意図的にあるいは計画的に進めていく、  
あるいはそういったことを目的として生まれた教育機関ではないかと考えているわけです。当然、幼  
稚園も教育機関である。そうであるならば、現代の社会の中で家庭とか地域社会の自然な状態では達  
成することのできない教育機能は何であろうか、こういったことを見通した上で現在の幼稚園教育と  
いうものの内容を組み立てていく必要があるのではないかと、という非常に素朴な発想がまずあったわ  
けであります。も一つは、幼稚園教育というのは当然対象が幼児である。したがってその幼児の発達  
的特性を理解しなければ教育はできないわけですが、それとからみあって幼稚園教育の本質をふまえ  
て行われるということは当然のことです。それに加えて時代の流れとか社会の変化を見通  
した上で、現在の幼稚園の教育はどうあるべきかということを考える必要があるのではないかと。具体  
的に申しますと、20年前と現在の幼児の生活にはどういう変化があるのだろうか。例えば先程副園長  
からも報告がありましたが、このテーマを設定する一つの根拠あるいは目的と関係しているわけ  
ですが、例えば人口が集中し、自動車も大変多くなってきた。そうすると、当然のことですがこども  
の遊び場となっていた広場が少なくなるし、非常にいい遊び場であった道路からも子ども達は追  
われてしまった。また核家族化で子どもさんが少なくなってきた。本来ならば、家の近くでお兄  
さんとか妹とか異年齢の子ども達の遊戯集団が成立したはずであります。異年齢の遊び仲間  
というものがない。それは私どもの調査でも出ております。3歳児4歳児5歳児それから小学校2、3  
年とだんだんに上っていく程、同じクラスの子とも達と遊ぶようになってしまう。とくに附属校  
園ですから、地域の公立の幼稚園や小学校に行っている子どもとなかなか接する機会が少  
ないという困った問題もかかえています。一般に最近の子どもは異年齢の集団をつくる  
ことが大変難しくなっている。これはコミュニティの崩壊ということも関係しています。さら  
に親、とくにお母さん方の意識ですが、子どもを遊びから遠ざける傾向が強い。例  
えば進学の問題とも関係して塾やけいこごとに通わせる傾向が大変

ふえております。そうしますと遊び場所もないし遊び仲間も少ないし、当然外で遊ぶ時間も縮小されてきた。今までその遊びによって子どもたちは人間らしく成長してきましたが、そのあたりに何か変化が起きているのではないか。具体的に申しますと、からだの面では背筋が弱くなってきて姿勢の乱れが出てきた。土ふまずの発達もおくれてきた。あるいは精神面で申しますと、耐え忍ぶ力と申しましょうか、耐忍性が弱くなってきている。そのほかにもいろんな現象が出てきている。こうした現象が出てきている原因は、多くのものが複合していてこれだと明確にいうことはできませんが、今の社会には確かにあるはずである。しかもそれがますます増大していく傾向にあるのではないかという危惧をもっています。このような社会の変動、子どもにとっては望ましくない環境の拡大に対して、幼稚園の教育はどうあるべきなのかという対応を迫られている。しかもそれは従来の経験だけではなく、もう少し科学的に研究をしたり、あるいは多面的な理論的根拠をふまえながらどうすればよいかを考え実践していく時代に入ってきているというようなことを考えたわけでありました。したがってこれからの幼児教育はそういう背景の中でどうあるべきなのかということを考えてみたいというのが、このテーマを設定致しました理由でございます。あまり司会者が長くしゃべりますと、あとの大変貴重な時間がなくなりますので、早速シンポジウムの講師の紹介をさせていただきます。こちらの方から発言順におすわり頂きました。京都教育大学教育学部附属幼稚園の副園長の藤原愛子先生でございます。藤原先生は長い間、幼稚園教育に携ってこられまして、幼稚園教育につきましてもベテランで、どういう領域につきましても精通されていらっしゃるわけですが、とくに京都教育大学附属幼稚園ではここ数年来、運動遊びの研究を続けておられます。また昨年からは文部省の教育方法等改善のための研究費を受けまして、“調整力を高める運動遊び”の研究を進めていらっしゃいます。そうした立場から御意見あるいは御質問がいただけると思います。その次におすわりになっていらっしゃいます方が東京学芸大学の近藤充夫先生で、運動遊びとか幼児の体育につきまして、長い間この道ひとすじという感じで研究を進めておられ、学界でも大変御活躍でこの方面の研究では日本では最もすぐれた方のおひとりです。いちばん向こうに座っておられる方が国立教育研究所第3研究部第4研究室長の永野重史先生でございます。既に雑誌とか本等でご存じの方も多いと思います。また去年は「予習は有害である」という本をお書きになりまして大変反響を呼んでおります。とくに幼児教育の全体的な立場から御意見を頂けるものと思います。以上簡単でございますが講師の紹介をさせていただきます。さてこれからの進め方ですが、15分以内で先生方に御意見を頂き、その後皆さん方の御意見なり、御質問なりをお受けしながら進めたいと考えております。よろしく申し上げます。

#### 藤原先生

今日は朝から子ども達が遊びをしている様子を見せて頂き、そのあと、いろいろ実践研究のお話、発達研究のお話、それをミックスしたところなどもお話頂いて勉強させて頂きました。先日資料も頂きましていろんな点ですべて網羅されておられて、私などお話するところではないと御辞退申

しあげたんですが、まあ同じようなことを研究していることだし、大勢の先生方が会場から発言もしくいだろうから、質問の皮きりでいいからお話をするようにということで出させて頂きました。このテーマから私の方の幼稚園の考え方とこちらの園の考え方とは、多分結局は一致するであろうと考えますが、私達はまず子どもが喜んで自ら運動する子どもにしたいなあ、運動好きな子どもにしたいなあと考えているわけです。運動といいますのはもう既にお話を伺っておられますように、健康なからだづくりや協同の社会性づくりや知的な探究などすべての基礎になるものでございまして、そういうものの原動力になるという意味で、私達は運動の好きな子どもにしていきたいなあと考えております。じゃあどのようにして運動の好きな子どもにするのかという時に、どのような経験や活動を選んで、どのような先生がそこに介在をして、子ども達をそういうふう育てていくのかということになるわけございまして、その時に選ぶ経験や活動というところで、この調整力を育てるということがかかわってくると思っています。で私達も時々話をしてはいますが、幼児期は調整力が伸びる時期なのだ。勿論筋力も育つであろうけれども、より調整力が育つのでからその時期に指導を加えることが発達の適時性という面から大変いいことなんだというふうに、いつもその方面の先生方から伺っております。そういう意味で私達が子ども達に運動経験をさせる時に、喜んで運動をする子どもを育てる時の底に流れるものとして、調整力を育てていくための経験をさせていきたいというふうに考えているわけでありまして。それで私の方の調査の方法とはちょっと違うわけですが、私がいつも考えておりますことは、どうしたら子ども達が楽しく遊びにとり組んでくれるであろうかということを考えているわけです。それで私達がよく大学の先生から言われるんですけども、幼稚園の先生はすぐ資料集を調べてみて、「これできるわ、それ面白そうや」とすぐ取りあげてしまう。これが幼稚園の先生の弱いところだといわれて、くやしいことが多いわけですが、経験や活動を選ぶ時に、子どもの興味と発達ということを私達はいつも考えておかなくてはいけないが、その時に非常に安易に興味と発達ということを考えるのではないだろうか、やはり反省してみなくてはいけないと思っています。そういう意味でこの園の調整力を育てるといふこの研究やいろいろな実践にしても、発達研究にしても役に立たせて頂けると思っています。それで朝から子ども達が自発的に4・5歳一緒に遊んでいる活動を見せて頂いておりまして、本当に先生方がいろんな遊びの工夫をしていらっしゃるということに感心したわけでございます。諸先生方も多分同感であろうと思います。それがいろんな場で展開されておりました。それが非常に尊い研究の結果であると思うわけでありまして。しかしそれにはそれなりに私にも質問がございまして、非常にたくさん場があって子ども達の参加が非常に多いところと少ないところがあって、木の所では「はじめの一步」なんかしていた所で非常にもりあがりがあったけれども、2人か3人でもりあがり少なかったところもあり遊び場が多いばかりに子どもが分散していて、高まりが見られるところと見られないところがあった。そういう点について多分今日はいろんな遊びを私達のために見せてあげようとお出し頂いたんだろう、すべて網羅されてい

るんだらうと思うわけなんです。けれども今迄ずっとこの活動をやっておられまして、1度にあれだけは出てこないだらうと思うんです。だから先生方の工夫が、2つ3つとこういうふうになって広がっていったと思いました。子どもの欲求もそこに加わって場の設定がされていたと思うんですけれども、子どもはある程度自分がやりたいことができる、しかもそれがあつる目標を達成できるという喜びがあれば、友達とする喜び、友達から認めてもらう喜び、先生からも認めてもらう喜び、こういうものの中で高まりがあつてある程度の集団の大きさというものがあるんじゃないかろうかと、そう思いながら今日は見ていたわけです。ですからきっとこれは先生方の方で今日のための特別な考え方であらうし、それもお聞きしたいし、先生方の人数と子どもが活発に遊べる場の設定の数ですかね、そういうふうなことも聞かせて頂けたらなあ。いつも楽しく遊べるためにということばかりをみているものですから、そんなふうなことを考えていたわけでございます。これはまあ質問なんですけれども、それにしても本当によくいろんな遊具とかそのものの工夫がされていたと思ひますが、私達がそこでひとつ警戒しておかなければいけないことは「わあ、たくさんいろんなものがおいてあるなあ、私とこあんなものないわ、早速帰つたらあれを作ってもらわんといかんわ」というふうに、すうつと安易にいつてしまひそうなそういう雰囲気、私達のまわりでお話しておられる方からちょっと感じられるんです。「あんな遊ぶものあらへんから、とつてもあんなことできないわ」とか聞えてくるんです。私はそれではいけないと思うわけなんです。私達のまわりにある身近なもので前からあるもので、それが生かされていないものはないだらうかということをついペン反省してみなくちゃならないということをつ今日考えていたわけです。遊具がなくても鬼ごつことか今日、だるまさんがころんだでしたか遊んでいましたね、ああいうものとか本の資料なんかにあります、なわとびとかその他いろいろ楽しい遊具がなくても友達誰とでも走つたりとんだりできるような遊びもあるわけです。今の子ども達はあんまりそういう遊びを知らない。だから誰でも参加できてなんぼでも人数がふやしていつて遊べるそういうふうな遊びを、もっともつといれていかなければならないと思ひました。それからよく言われることですが、固定遊具の遊びというのが飾りものになっているということをつ言われます。置いてあるだけなんだと、ジャングルジムなんか登つたらおしまいだと、すべり台はずべつたらおしまいなんだと。ああいうものは幼稚園にいるんだらうかというような話が極端な話ですが、でもそれがござひます。でもそれをつつた遊ばせ方を私達が十分やつているだらうかと。ただおいてあるだけで子ども達が遊んでくれないと言つてないだらうか、そういう点をもつと工夫していつけば、ただすべるだけではないんだ逆さまから上つてもいいのじゃないかということとか、その他子どもの発想をもつと大事にしてやれば、いくらでも遊ばせ方というものつ子どもから教つてもらえるわけなんです。そういうふうなことも私達は考えておかなければいけないと日頃考えておひます。それから今日のお話でもボール遊びがよく出て参りました。私達の方でもボール遊びが大変調整力を育てる遊びだつというふうな研究の結果が出ておひます。勿論これは5歳児でござひます。今日こちらでも5歳児は

ボール遊びが好きだと、ほうっておいても自発的に遊んだというような発表がございましたけれども、そのことと考えあわせて、やはり子どもというものは自分が好きで一生懸命にとりくむような遊びこそ調整力が育つんじゃないかなあというふうに考えながら聞いていたわけでございます。ボール遊びでもいろんな工夫があると思うんです。3歳・4歳・5歳と比較すると5歳児が大変伸びるわけですけども、そうかと言ってそれじゃ5歳児にだけ経験させたらいいのかと言えばそうじゃないわけで、小さい子どもでも先生がぼーいとボールを遠くへ投げ「誰が早く取りに行けるかなあ」と言えばみんな競争で取りにいきます。だからいくらでも遊ばせ方の工夫というものがあるわけですし、私達はいろんなものは持っているけれども、それをうまく活用することをあんまりしていないんじゃないかなあ、そういう点を子どもとのかかわりの中で十分に研究していきたいものだと思います。それから子どもが楽しく遊ぶ時に、私はやはり先生の位置というのが大事なことになると思うんです。勿論年齢によっては違うかもわかりませんが、先生と一緒に遊んでやる、先生が喜んでしまうといったことが時にはそんなことがあっていいのじゃないかと思うわけなんです。また先生の言葉かけ、これがとても大事だと思います。こちらの先生もいろんなこと言って子どもを励ましたりしていらっしゃったりしていましたけれども、私達はいつもそんなことを考えているわけなんです。ひとりひとりの子どもにあった認め方、声のかけ方があると思います。やはり先生の構えですね、そのところの構えといいますか考え方と言いますか、例えば「こんなふわふわのマットがある、その時に子どもにこわくないからさあとんでみようね」というのと「ほうらいい気持ちよ、ふかっとしていい気持ちよ、さあいらっしゃい」と言うのとでは子どもがどれだけ、かわるだろうか、それから鉄棒をして子どもが豆ができる。「先生豆できて痛いわ」と言ってきます「ああ痛そうや、かわいそうやなあ、しばらく休んでなさい」というのと「ほう豆できたの、それ固うなったら上手になるよ」というのとでは随分違って来るわけなんです。そういうふうに子どもに対して先生がからだで、ことばでどのようにかかわっていくのか、というようなことも大切なこととして考えていきたいものだと思います。いろいろあるんですけども、最後にもうひとつは質問のついでにこちらの会場の方の皮きりをさして頂きますけれども、こちらの調整力テストの調査の仕方がちょっと私どものしているのと違うわけなんです。それで調整力テストの中で調整力はいろいろな要素をもっているようですけど、その中で協応テストというところに重点が置かれている。これは調整力テストの中核をなすということで、これをとりあげられたのかどうか、そのあたりをお聞きしたいなと思っております。それからその協応テストのことをやれば、そのほかのことも育っていくのではなからうかと、なんか私はそんなふうに思うんですけどもそのあたりのことも聞かせて頂きたいと思います。それから中村先生が御発表になりました本の39頁から42頁での表のよみとりと関連いたしまして、表5のところなんですけれども、他の先生方も多分ずっとみておられると思いますけれども、まりの実験群は的あての目と手の協応である的あてがよいと。それからなわの実験群はけんばの目と足のけんばがよいというよう

な御発表があったと思うんです。とびこしくぐりもけんぱも的あてもこれは遊びとしてとりあげられていて、そのひとつひとつが目と手とか目と足とか、とびこしくぐりは目と全身というふうに、もうひとつの資料にかいてございますけれども、そういうふうに分散して抽出されているわけですね。まり遊びは目と手の協応が育つであろうということでもとりあげられて、そして調査をしたら、目と手の協応性的あてがよかったと。こういうふうに理解するのかと思うんですけれども、同じ要素のものは練習したら上手になるのは当たり前と思うんです。だからもうひとつ、これはこれでいいんですけど、まり遊びもなわとびもどちらも調整力を育てるのにいい遊びだと思いますので、こういう分解的じゃなくて調整力という形でまとまったものでもうひとつ裏づけがとれないものなんだろうか、このあたりを聞かせて頂けたらなあと思っているわけでございます。質問が上手にできたかどうかわかりませんが時間もあまりございません、一応これで終らせて頂きます。

#### 司会（丹羽）

ありがとうございます。只今の御意見としましては、喜んで運動に参加することができるような子どもに育てたいんだということで、そのためにいろんな遊具の工夫であるとか、その遊具につきましても新しく買わなくても、そこらに転がっている材料で考えていけば、十分に楽しい遊具になるんじゃないだろうか。あるいは遊具がなくても大勢の子ども達が参加して楽しく遊べるものを考えることができるはずであるという御意見とか、あるいは言葉かけ、子どもの発想を大事にするということが大切じゃないかというお話がございました。そこで調整力のテストの問題とかかわりあって、この幼稚園の今日の発表をお聞きすると、分析的にわけて調査しておられるけれども、例えばその中心に協応性がおかれているようである。それはどうしてそういうことになっているのか、例えば協応性というのは調整力の中心、中核をなすという考えからなのか、それとも協応性が発達していけば、他の敏捷性であるとか平衡性であるとかいうものが伸びていくというふうに考えて、それをやっているのか、こういう御質問が第1点にあったと思います。第2点はよく似たことなんですが、こういうふうに分析的にとらえるのではなく、調整力全体をまるごと調査できるようなそんなテストと言いましょいか評価のしかたはないものだろうか、そういう二つの御質問がございました。もう一つ午前中の公開保育で多くの場があったんですが、その場では子ども達が大勢集まって、高まりがあった所と、集まりが少なく高まりのない所とあったんですが、子どもが活気のある遊びができるような場の設定、あるいは子どもの人数と場の数といたしましょいか、そういったことについて何か御意見を頂きたい。そういった御質問だったと思います。どうしましょうか。（しばらく相談）それじゃ今お答えを頂いた方が質問がほけなくていいだろうという先生方の御意見でもございますので、先ず順番から申しまして午前中たくさんの方が設定されたが、そこでは大勢の子どもが集って高まりのあった所と、少ない所とあったけれども、これは適切な人数と場というものがあるんじゃないかという御質問について如何でしょうか。

## 大橋副園長

私がお答えて足りないところは実際にやったものなり、園長先生に補足して頂きたいと思います。年齢混合の時の遊びにつきましては、人数の多い方が活気ができるものと、人数が少なくても自分達で技を競ったりなんかする方が楽しいものがあるんじゃないかと、高まりについては思うのです。遊びの場が非常に多かったという御意見なんですけれども、ふだんもっと多いんです。それでいろんなものを試してみて、そして子どもが自分で選んでいる時にだんだん消えていった遊びというものはカット致しました。そこで残ったものがあれになったということになると思うんです。それでその子どもが選ぶ時に好きなものを選びますので人数が多いのもあれば少ないのもあったと。それから途中で消えていったものもあれば、消えたと思ったらまた出てきたものもあったというふうな状態だったと思います。ですから私どもが意図的に、これはあまり子どもはしないけれどもやっぱり今日はお出していただいた方がいいのではないかと考えて、出しておきましたものは、実はマットととび箱だけでございます。あとは子ども達がいろいろな遊びをしながら作り出していったものの中から、だんだんと残ってきたものを残したという形で、要項にも書いておきましたけれども、子ども達が考えたいろいろな遊びがたくさんありましたので、あれもこれもと大体予想したものをならべました。それで昨日あたりにもう1回子どもの様子をみて、この位は残しておいてあげないといけないのじゃないか、例えば段とびなどに行く子は少ないけれども、いきたい子もあるんだから、やっぱりおいておこうかというふうな形で残したものが今日の状態でございます。で例えば島鬼が出ないで丸鬼が出る場合もあるんです。だるまさんがころんだは割合にルールも簡単だし、自分達でルールを広げていくことができる。それから小さい子は小さい子なりにできるというので9月からずっと人気のある遊びの一つであったわけです。それですから人数につきましては多いところも少ないところも、たったひとりでするところもあっていいのではないかと考えているわけなんです。で先生がなかなか目が届きにくいということがあると思います。ですから5人の先生、担任4人と、補助教官1人がなるべく場所を分担して危険な時だけは行く、それから子ども同志で解決できない問題が起った時には助ける。その他は子どもに任せるといふ姿勢でのぞみました。そんなことでよろしゅうございますでしょうか。

## 司会（丹羽）

それから次に参ってよろしいでしょうか。調整力のテストの仕方の問題として協応性を高めれば調整力を構成している他のいろんな要素も高まるという考えからかという御質問ですが。

## 大橋副園長

このことにつきましては園長が専門ですので、私の言い方が足りないと壇上からきってお言葉が出ると思ってまあ私なりに申させて頂きます。調整力の中心が協応能力を高めることだというふうには私自身は考えていないわけです。中村教官の発表の中にもありましたまりつきとなわとびにつきまして調整力の調査をしましたのは、とび越しくぐりは敏捷性、けんばは律動的平衡性、的あては目と手

の協応ということで調整力の3つを調査しているわけなんです。でそれによりまして調査の結果が協応性の面で特徴が出たんじゃなかろうかとかこういうふうな結果であるということだったと思うんです。中村教官の発表の中にも、なわとびをすればすべての調整力が発達するともいえないし、まりつきをすればそれが発達するとも言えない。やはり巾広い経験が必要じゃなかろうかという発表だったと私は聞いておりましたんですけどもいかがでございますかしら。

#### 司会 (丹羽)

よろしゅうございますか。会場の皆さんも今のお答でおわかり頂けたと思います。でもうひとつございますが、調整力を要素的に分析して調査しておられるけれども分析しないで、まるごと調整力をはかれるようなテストはないものかという御質問でございます。

#### 大橋副園長

私は勉強不足でまるごと測る方法を存じませんのですけれども、分析して測ったら子どもを分析的にとらえるということではなく、ひとつの手がかりをつかもうということだと思えます。どちらかと言いますと端的に知るためには、ひとつの窓口から突こんでみるとわかりやすかったことで、やっぱりこういう方法でやってみるとわかりやすかったというのが私の印象でございます。

#### 司会 (丹羽)

どうもありがとうございました。

#### 大橋副園長

園長先生けしからんと思われましたら補足修正をお願いします。

#### 司会 (丹羽)

いいけしかりますので(笑い)またこのことに関しましては京都教育大学の附属ではこういう分析的な方法ではなしに、これを測れば調整力全体がわかるんではないかという研究を進めておられると思いますので、後程、藤原先生からそういう御紹介も頂けるのではないかと思います。先を急いで恐縮でございますが近藤先生にお願いしたいと思えます。

#### 近藤先生

私の方からは、これからの幼児教育における運動遊びということで現在の幼児教育における運動的活動の問題点みたいなものを考えて、それに対する私なりの提案をしてみたいと思えます。以前には家の中でいわゆる受身的な知的な興味なり、関心というものに耐えられるものがなかったんですが、現在のように、例えばテレビがあるとかあるいはいろんな遊び道具、ゲーム的なものがあったりとか、そういうものが家の中に豊富になればなるほど子どもの素質的なものになっているんですね。過去の子ども達を考えると、そういうものが家の中になかった、あるいは母親が大変忙しかったりましてうるさいから外へ行けなんていうことになりまして、そして外に出された場合に何をして遊ぶかという場合に、一番その年齢層に知的な対応ができる遊びは何かというと、それが運動的な活動だっ

たと考えるべきだろうと思うんです。その辺のところをあまり考えないで、子どもに運動的な活動をさせようさせようというところに問題点が出てくるんだろうと思います。それからもう一つの問題はいわゆる今の子どもは体力低下している。そこで体力を高めなければならないという、発想でいろんな研究がなされてくるわけです。例えば最近の研究で生理学的な面でいきますと、子どもに長い距離を走らせてどの位耐えられるとかですね、そういう研究も出てきております。この面の研究では、いわゆる幼児を対象としたものはあまりなかったといわれるんですけども、したがってその研究結果は非常に貴重なものではあるけれども、それが大変困った方向にいつてしまう。例えばある研究者はそういう研究を発表したあとで、幼児がこれだけ長距離的な距離を走ったりするのに耐えられる。だから幼児にそういう長い距離を走らせていいんだという発想、もっと言えば幼児にもっとマラソンをさせるべきだという、そういうふうな言い方をしてしまうということなんですね。いわゆる幼児の生理的な能力に関する実証的な研究かも知れないけれども、だからといって幼児にそういう距離を走らせていいとか、その活動をとりあげてやらせるべきだということには僕はつながらないかと思う。

次に調整力の考え方は、必ずしも一致しているわけではありません。それから調整力は幼児期が一番のびる時期だというおさえ方も、私は必ずしもそれに賛成するわけではありません。ただ私はここで考えたいことは、生まれた時から、あるいは生まれる前から運動を問題にするわけですけども、生まれてから自分の意識で随意的な運動をしていくという時に、どんなふうに子どもが運動というものを獲得していくのか、その運動の種類というのは、乳児期から幼児期になってどういうふうに広がっていくのか、そういうとらえ方をしてみることが幼児を指導していく場合に重要じゃないかという考え方をしているわけです。例えば乳児期であるならば寝がえりをうったり、ころがったり、這ったり、そしてつかまり立ちして歩くということを、どんなふうに子どもが経験し身につけていくのか、その過程の中で、子ども達は知的にどんなに発達し、情緒的にどういう、あるいは社会的にどう発達していくのかというように、全体の中で運動というものをとらえていく。同じように、幼児の場合もそういうとらえ方をしなければいけないだろう。私はそういう面で考えますと、それは丹羽先生と昨日ちょっとお話したんですけども、要するに大人が行なうスポーツであるとか、あるいはスポーツではなくても、私達日常生活で行なわれているいろんな全身運動的な活動があるわけです。その基本のパターンなるものはいつでも身につけているかを考えると、実は幼児期だということになるわけです。その幼児期にいろんな多様な運動を身につけていくことが、将来の生活における全身運動や、あるいはスポーツなどにつながっていったということが考えられるわけです。そのいろいろな運動を見ていきますと、いわゆる調整力あるいは筋力とかいろんなものが含まれている、そこでどうしてもおさえおかなければならないことは、単に筋力ではなくて、実は動きなんだ、動きを考えればたしかに調整力というものがいつも頭になければならないであろうし、そういう活動の展開においておさえおかなければならないだろう。じゃあ我々は子どもにどんなふうに経験させるべきかってこと

をみていきますと、子ども達の活動をみた場合に、なぜ子ども達はああいう運動に取り組んでいくかといえますと、からだを動かすということが楽しいってことがあるかも知れない。けれどもそれよりは、例えばゲームでですね、どこを攻めようかとか、どちらが勝ったとか、なわとびを何回とべたか、どうやって相手をつかまえようかとか、結局そこに面白さがあって、子ども達は遊んでいるんじゃないか、例えば3歳児の場合はそこまでいなくても、山をこう登っていく時にカップラーメンかなんか持って行って「おそばですよ」と持っていくんですね。そこで先生が「ああ出前さんですよ」とか言ってるんですけども。そうして登っていったら。そこでは、よじ登る面白さみたいなものがあるかも知れないが、同時に先生に持って行ってあげたい、配達してあげたい、やってあげたいとか、そこでは実際運動が行なわれていて、その運動が結果的には調整力を高めることになるだろうし、体力を高めることにもなっているんですから、あまり体力とかそういうことを意識するのじゃなくて、どうして子ども達はそういう遊びをしたがるのか、どうしてそういう運動をしたがるのか、そこを的確にとらえてみるのが、まず大切じゃないかと思います。ちなみに体力を考えるなら、運動をすれば、当然体力は高まっていくと考えられる。体力を身につけるよりは、どれだけの運動的な活動ができるかという方に目をむける方が、むしろ幼児期を考える場合には、適切な考えじゃないかと思っています。それからもうひとつの問題は、運動的な活動を考えますと、とかくこちら側がこうやったら運動してくれるんじゃないかという形でいろんなものを用意するという、そういう方向性があるんじゃないか。しかし、これは別な言い方をしますと、子どもにとっては受身の活動じゃないか。で先程私が話しましたように、なぜ子どもが運動的な活動をするかという理由から考えた場合、子どもの活動は能動的な活動であったはずだということです。要するに自分が何かして遊ぼうという場合に、受身としてすぐ遊べるものがない。外へ行って自分からこういう遊びにする、そういう形で行なわれたものが運動的な活動ではないか。たとえばそこに非常に貧弱な物がひとつしかなければですね、そこをけとばしてみるとか、棒ぎれであってもけとばしてみるとか、あるいは、ひっぱいてみるとかですね、そういう形で自分の遊びにしていたんじゃないかと思うんです。そうするとあまり受身的な運動的な活動を考えると、実は現在の子ども達にいちばん問題になっている受身的な生活そのままになりはしないか、本来運動的な活動ということは、何も無い所で自分で遊びをしていく時に、一番遊びになりやすかったものが運動的な活動だと考えてみると、逆にできるだけ貧弱な環境であるということが、子どもが能動的に取り組むきっかけになると考えられないか。このようにいわゆる子どもに運動を経験させる場合には、環境が大切です。豊かな環境を作ってあげればいいというんですけども、その豊かなという発想が大人の側の発想じゃ困るんじゃないか、要するに子どもにとって豊かだってことはどういうことかという、子どもがいろいろ考えるその自由度が広いといえますね。こうも考える、ああも考える、そういうものが豊かな環境なんであって、大人がこのためにはこういう遊具がいいですよと揃えることは、逆にいえば子どもを貧弱にしようとするところがあるんじゃないかってこ

となんです。私は運動遊具について、もし批判するとするならば、この遊具はこの遊びしかできないって遊具が一番子どもにとっては駄目な遊具である。この遊具は子どもの側にとって、こうも遊べる、ああも遊べると、その遊びがたくさん出てくるもの程、幼児にとっていい遊具である。ところがある面でいきますと、何々のために遊具として次々と大人が工夫していくことがある。これは非常に子どもを受身的なことにするんで、基本的な運動的な活動を能動的にしていくことにはなっていないのか。そういう一つの考え方ができるんじゃないか。私は極端な言い方をすれば、子どもを貧弱な環境の中においてやれば、能動的な活動をするようになると思います。例えば、なわ1本で子どもがどのくらい遊べるだろう。丸めて遊んでみたり、ひっばって遊んでみたり、輪にして遊んでみたり、いろんな遊びをします。これは私だけかもしれないけれども、私の子どものころは、そういう遊びをしたはずなんです。ところが、輪ならばフープを用意しましょうとか、投げたりとったりするんだったらボールを用意しましょうっていう、そういう発想では、遊びが子どもの本来の遊びにならないんじゃないか。ボールを投げて遊びたかったら、ともかく丸めてみて、しばってみて、このように遊ぶんだっていうですね、そこへもっていくものでなければいけないんじゃないかと感じて、そういう面で、非常に子どもにとって豊富な経験ができる材料というものは、必ずしも大人の側がたくさん用意したからできるというものじゃないだろう。これが一つあるだろうと思います。そしてもう一つは、幼児にとっての運動を考える運動教育の考え方があるわけです。実際に運動教育について、最初いくつかの本を出している人たちは、最初、障害児についてやり、そこから普通の子どもも、という発想のし方をしていると聞きます。そういう面で、最近日本で訳された「身体発達の運動」だったでしょうか、今ちょっと忘れちゃったけれど、訳本で、イギリスのシンポジウムをまとめた本がありますけれど、その中で言っていることは、いわゆる子どもの運動的活動は、1つには、子どもの身体、あるいは知的、情緒的、社会的なものを伸ばしていく、いわゆる発達を進めていくという役割と、身体的、知的、情緒的、社会的なものを統合する役割りとがある。その面で障害児の場合に、いわゆる運動的活動ができない、ということが、どこに問題があるかということを指摘しています。そういうことをとらえた方で、幼児の運動を考えていきますと、大人の文化というものを、子どもにやさしくすればいいっていうかたちで、おしつけることはおかしいんじゃないか。子どもが、たとえば3歳にはどんな遊びをするか、4歳ではどんな遊びをするか。ちょっと今日ですね5歳児と4歳児がいっしょに遊びながら、5歳児が遊んでいることを4歳児に伝えていた。実は、幼児の文化は、幼児がそれを伝え合うっていうことなんです。そういう面で考えていくと、教師が指導することが、実は大変危険なことがあるんじゃないか。そこを教師が、十分おさえておいて、幼児の立場を考えた上で指導することを考えてみる必要がある。別な言い方をすると、これも極端な言い方をすれば「先生、へたに教えない方がいいよ」「教えるのは、子どもにお願いした方がいいんだよ」っていうことがあるかもしれない。しかしそれは、非常に極端な言い方をしたわけですけども、いわゆる大人っていうのは

子どもをどうとらえ、こういうものがかけているかもしれないとか、どういう環境を用意し、その方向づけをどうするかなどを考えるためには、大人の知恵というものは必要なんですけども、実際に取り組ませる時には、むしろ子ども同志なり、子ども自身の工夫や発言という形で学習していく。これが幼児の本当の姿じゃないか、ということを考えてみなければならぬんじゃないか。まあ、私なりの提案をしてみました。以上です。

#### 司会（丹羽）

ありがとうございました。たいへん多くの内容を、御示唆いただきました。全部をまとめることは時間的にできませんけれど、たいへん重要なことが出てまいりましたので、その点をいくつかまとめさせていただきますと、子どもの知的活動に耐えられる運動遊びがあるかどうか。これは大変重要なことではないかと思えます。かつてテレビのなかった頃には、おそらく外で遊ぶことが最も楽しいことのひとつであった。ところがテレビが出てきて、それを見た子どもが楽しいと思う、そういうものよりもっと楽しい運動あそびがどのくらいあるのか。だから子どもは楽しいテレビに向くのは、ある意味では当然ではないか。ことばをかえていうと、そういう御指摘になりましょうか。それから、幼児に経験させれば発達する。じゃ発達するからそれをすぐ教育の内容として取り込んでやっていいかどうかという、重要な御指摘もありました。ほかにもたくさんございましたが、調整力と関係して申しますと、調整力の概念というのは、いろいろな学会がありますが、たとえば体育学会や体力医学会などでも、まだ一致しておりません。具体的に申しますと、近藤先生と私もまだ一致していませんが、要するに、子どもの動きや子どもの運動遊びを考える時に、子どもがどう動くかという動きが大事なんだ。そういう動きを考えると調整力というのは大変重要なものになってくる。その場合調整力の概念であるとか、調整力を高めるためにはどうすればいいかということは、ちょっと横におきまして、おもしろく子どもが遊んでいる場面、それはどうしてなんだろうかという原因を的確にとらえることが重要なんだ。案外私たちは子どもが遊んでいる場合「あ、こういう場を設定したからうまくいった」というふうに考えておりますけれども、もう少し細かく検討してみたら、もっとちがう内容が出てくるかもしれない。それがわかったら、今度はそれを準備したら子どもはおもしろく遊ぶことができ、結果として調整力もついてくるのではないだろうか。したがって楽しく遊ばせる工夫が大切であるという御指摘ではなかったかと思えます。それから、これまた大変重要な御指摘があったんですが、遊具が子どもの自由な活動を逆に規制しているんじゃないか。物的に豊かな環境は子どもの活動を受動的にするので、物的に貧弱な環境の方がよい。また一つの遊具が多く目的に使えるものほど、よい遊具であるという御指摘です。これは、精巧な遊具になればなるほど、子どもがそれを使って自由に想像し、遊びを発展させていく可能性を束縛してしまう。具体的に申しますと、非常に精巧な汽車は、汽車としてしか遊べません。ところがマッチ箱ですと、汽車としても自動車としても、その他の箱としても遊ぶことができる。この違い。ちょっと余分なことを申しましたけれど、要する

に大人が豊かだと考えている遊具が、子どもの自由な活動を規制しているということを、考える必要があるのではないか。特に受身的になっている現代の子どもを考える時、これは大変重要なことではないかと思います。それから最後に、大人の文化をやさしくしたら、子どもの文化になるんだ、という発想はあやまりである。むしろ子ども自身の姿に学ぶという態度が必要ではないか。そして子どもが工夫し発見していくような教育が必要である。ひと言でまとめますと、そういう御指摘であったのではないかと思います。まだたくさん重要な御指摘があったかと思いますが、一応このくらいにしまして、最後に、永野先生にお話をうかがいたいと思います。

### 永野先生

私は特に運動っていうのは専門でない。大橋先生から電話をいただきまして大変懐かしかったので、「すぐまいります」というようにお答えしましたけれど、どうも、その時、よくテーマについてうかがわずにご返事しまして、あとから運動だと聞いて、これはいけないと思いました。といいますのは、だいたい私、小さい時から、運動はどちらかというとな得手でありまして、まずかけっこがおそい。運動会があるとびりになる。それから、近頃はあまりやりませんが、私どもの頃は、小さい時は「おゆうぎ」というのが非常に盛んでして、レコードに合わせて、右の方へ3歩ぐらい歩いてって、くるりと輪の真中の方を向いて手を上げて、こんなふうにおじぎをしたりする。で、あれがもう照れ臭くて苦手でありまして、まあ、おそらくその2つでしょうね。そういうことをやらされるまでは、特にきらいだとも思いませんでしたけれども、それできらいになりました。で、運動とか体操とか言うとな、これは困ったという感じがするのです。ですから、あまりまとまったお話はできません。それを前もってお断りしときまして、まとまった話を聞けるとお思いにならないで下さい。そういう心配をしながらここへ来たんですけれども、午前中の保育を拝見いたしまして、その時は心配を忘れまして楽しませていただきました。といいますのは、いわゆる体操だと、これは困るなと思っていたのですが、体操という感じがしませんで、どちらかというとな、遊園地に近い。みんながあっちこちで遊んでいるこれはまあ、遊園地みたいなものだ。近藤先生は、あまり教材教具が多くない方がいいとおっしゃるんですけど、私はどちらかというとな、いろいろ沢山あってにぎやかな方が好きでありまして 例えば大変気に入ったのは、大体もう来る前にいろいろ気に入りまして、ひかりのくにのあの本（調整力を高める運動遊び）を宣伝したりしてたんです。たとえば、かばにえさをやる、というのは大変気に入りました。ある町の保育園の先生ですが、野外の自然で保育をやっている、その時の活動をいっしょうけんめい記録にとって、さてこれからどういう結論がでるのでしょうか、というようにおっしゃってるんですね。で、私はどういう結論って、大体記録をとる時にどういように考えてらしたのですかと尋ねましたら、いやあんまりはっきりしないんですが、とにかく記録をとって分析しようと思ひまして。というんですね。で、私は助言もしにくくてとまったんですが、そこで思いついたのがこちらのまだ保育を拝見する前の印刷された本でして。とにかくお帰りになったら、あれを何とか手に入

れなさいと。で、園でそういうのをやっごらんない。たとえば、園でそういうことをやっているうちに、その、自然公園へ行った時の活動がどう変わるか、その間にどんな関連があるのかなんていうようなことを、ごらんになったらどうでしょうか。あるいは、自然、自然というけれども、自然な状況と、いろいろ遊具を用意した状況と、一体子どもはどちらが活発になるのか。それからまあ、自発性ということについても、ほんとに自然の方が、自発的になるのかどうか、そういうところをぜひ見比べて下さいませんか、というようなことを申し上げたんです。というのは、やや私は、自然ということに疑いをもっておりまして、東京におりますと、自然がないから、遊ばないっていうんですけども、いろいろこういう自然があるはずの割に山奥に行きますと、割に子どもが遊ばない、特に近頃遊ばない。木に登るということも少ないし、大体山の中に入って行こうともしないってことをよく聞くんです。その理由を聞いてみますと、親が山に入っていない、プロパンガスがいけないらしくて、山へ粗朶を取りに行くことがない。親が入っていない山なんですから、子どもが人っていくことも、どうも少なくなるらしい。まあ、異年齢にしてはあまりにちがう親子ですけども、やっぱり年上の者がやって見せるというのは子どもに大きな影響を与えるので、子どもにだけ自然を用意してですね、自分はなにかテレビゲームというようなもので遊んでても、絶対、こどもは遊ばないだろう。で、そういう時はどうするか。親は何とか山へ入れといっても生活がかわってしまうと無理なので、そういう場合にはやはり、「自然、自然」とさわがないで、子どもが活発になるような、遊具をそろえるのもいいんじゃないか、などと思っているのです。そして、割に人工的なものも好きなものですから、来てすぐ気に入りましたのは、天秤の両側に穴があいておりまして、あれにボールを入れるのが非常に気に入りました。というのは、大体小学校に入りますと、もののつり合いなんていうことをいっしょうけんめい実験室でやるんですけども、それ以前のつり合いを、生活の中で実感をするということが、どうも欠けているのではないかと思っております、ああいう、大きい天秤でやってみるのもいいんじゃないか。もうひとつは、それをあれだけだったら、地面から投げてもいいはずなんです、どうしてああいうことになったかはわかりませんが、こう段がありまして、高いところへのぼっていく。3歳児が登っていきまして、そして高いところから投げている。あれはおそらく高いところから投げているところが、子どもにとっておもしろいところで、それがおもしろいから高いところへ登っていく、というような関係があって、全体として非常にうまくできているんじゃないか。というように思ったんです。それで、教室の方に行きますと、何か、いわゆる発見コーナーというのがありまして、別のものですけども、木でつくった天秤がありまして、ひき出しをあけると、木のこけし人形みたいなものが、大小のものが入っている。そういう小さなところでいじってみようと思えばそういうこともできるようになっている。でまあ、子どもにとっては、玉入れの時の物のつり合いと、教室の中のそういう発見コーナーのようなところにあるもののつり合いとを関連づけて考えることができるんじゃないか。つまり今日のテーマは、調整力をつける運動ということになっております

けれども、保育を実際拝見してみますと、テーマがテーマですから多少運動が目立つということがありましたがけれども、決していわゆる幼児体育教室のようなものではなくて、十分に子どもの生活から出発したものになっているんじゃないかと思ひまして、いろいろなものを非常に楽しく拝見させていただきました。こういうような保育研究だったら、いっしょに研究させていただいても、きっと楽しいだろうなと思ひました。こちらの先生方、今日の発表のために大変だっただろうと思ひますけれども、おそらくみなさん楽しんで研究なさったんじゃないかと、うらやましく思つたぐらいでした。で、そこから先は、素人の悲しさで、だめになるところなんです。というのは、体育関係の方にうかがいたいところなんです、いったい、人間のからだの動きっていうのは、運動ということ、あるいは動作ということだけで取り出すことができるのかどうか。ということを素人なりに私は疑問をもっているのです。たとえば、どういうことから疑問をもったかと申しますと、ぜんぜん体操と関係がないんですけど、言語学者で、サピアという言語学者がいて、この人の書いたものの中に、いわば、運動といえば口の運動のことが出てまいります。みなさん、英語でお習いになった発音です、その何故とか、何とか言う時に、HOWというつづりが出てきます。私が中学1年に入った時には、ああいうのをみんな「ウ」っていうようにならなりました。ですから「ウワイ」であり「ウオット」でした。で、そのうちにアメリカ英語が入ってきますと、かわりましてそのウの前に「フッ」というのがつきましてね。「ハワイ」とか「フォット」というようにかわりました。サピアという言語学者が問題にしているのはその「フッ」という発音でありまして、これがそのアメリカ人であると、全部その発音ができるかという、発音のできない地域がある。つまり、私が1年の時習つたような「ウワイ」とか「ウオット」というような言い方をどうしてもしてしまう。で、そういう連中にいっしょうけんめい発音の練習をしてもできないんだけど、実はそのへん、音声学というのは私、素人ですけど、サピアに言わせると、その発音というのは、ろうそくを吹き消す時「フッ、フッ」とこうやる。その発音なんだというんです。音としては、で、口のかっこともそれでいいっていうんです。じゃその「ハワイ」とか「フォット」とかいう発音のできない連中が、ろうそくを吹き消すことができないかという、そんなことはない。ろうそくなら吹き消すことができ、その時には「フッ」という発音がきちんと出てる。ただそれをことばとして言おうとすると出ないんだ。その発音というのは、発音の口の構えとか、運動ということではなくて、なにか、心理的なものがあるのに違ひない。えー今日の先程からのお話でいうと神経的なものということになりますけれども、運動ということだけではなしに、神経的なものがあるに違ひない。ということなんです。で、そうしますと、たとえばこれを運動の方へうつして考えますと、ボールを同じようなかっこうをして投げていまして、その中には、やっぱりそのさっきの話でいえば、ろうそくを吹き消す時のと、それから、ことばとして発音する時のように、形は同じ、結果も同じだけれども心理的にちがったものがあるんじゃないか。で、そういう時にですね、それを結果からみて同じことをやったというように言っているものかというよ

うな疑問をもつわけでありませう。私、幼稚園の子どもについて言いますと、そういうことに関して経験しましたのは、幅とびのテストを昔やらされたことがありまして、全くよく知らなくて、大人の幅とびと同じように、線を描いておいて、できるだけ前の方にとびなさい。というように言ったんですね。で、そうしましたら、跳べない。40cm位しかとべない子がいっぱいいる。すごく驚きましたね、幼稚園の子どもってこんなに跳べないのかって思うようになっておりました。そのうちに、そういうテストなんていうことではなしに、いろいろ遊びのおつき合いを子どもたちとやってみました。床に丸を描いてですね、こう、ぼんぼんとぼしているのと、とべない子なんていなくて、幅とびのテストをした時に比べると、非常によくとべるんですね。で、その時に思い出したのが、さっきの「HOW」でありまして、要するに、幼児にとって、抽象化された運動なんてない。って素人考えで、かってに思い込んだのです。

つまり、これは昔、倉橋惣三先生なんかがおっしゃった「生活」ということなんだと思いますけれども、この幼児にとって、最初にあるのは、まず「生活」なんだ。「あの、丸のあるところまでとぼう」ということになりますと、これは生活になるんだ。けれども幼児の段階では、線をひっぱっておいて「できるだけ、前方へとべ」なんてことは、おそらく生活にならないんだろう。というように思いました。で、また先ほどの、午前中の保育にもどりますけれども、そういうことから考えまして、例えば、こう1本橋をわたって行って、おしまいのところ、ポールがぶらさがっていて、それに鈴がついている。そこに「ポン」ととびつくと、そこで鈴がなる。それにまりをたたいた手ごたえもある。そういうようになっていたり、あるいは、あれは鬼ですか、的の片側に鬼があって、そこにぶつかると、的の看板がぐるりとまわる。というように何かやってみると、やってみただけの結果がもどってくるという。そういう生活的な面になっている。そういうところが、単に体育じゃないなというように思っています。別に、こちらにうかがわせていただいたから、おせじを言っているのではなくて、私、この幼児の保育に関して、難しいとこだと思うんです。つまり、1つにはですね、遊びをさせておけばいいというので、倉橋先生のことばで言えば、いわば、無案保育というのですが、つまり保育案というのがまるっきりない保育というのが、あたかも、幼稚園教育の本道であるかのような誤解を生んでるところが、全国あちこちに見られると思うのです。その逆に、極端なところではですね、運動についていいますと、オリンピックがお手本になりまして、それが、おそらく近藤先生が非難されるところだと思えますけれども、オリンピック選手のやっているような種目が前にあってですね、それをやさしく幼児向けにおろして行って、そして種目に向かってじゅんぐりに積み上げていく。そして、いわば体育の運動選手の養成コースの1番の初歩のところを幼児にやる。そういう種類の体育教育というのが一般に近頃あるように思えます。ちょうど、音楽でいいますと、よく悪口を言う人は、芸大、いわゆる昔の音楽学校のいわば、音楽家養成の音楽教育というのがあって、それを小学校までおろしてきたのが小学校の音楽教育になっているからいけない。それを幼稚園なんかにおろして

きては絶対にいけないんだということをよく言いますね。つまり悪口を言う人は、音楽学校や芸大式のはいけないんだ。と、個人名あげていう人もいますが、まあやめときます。で、そんなところから出発するんじゃないくて、もっと、たとえば子どもたちが普段もっと、ことばを使っている時に、はやしことばってというのがありますね。私ども友だちが何か悪いことをすると、「いけないんだ、いけないんだ」とこう節をつけて歌いましてね、自然にふしがついてまいります。そういう節がついている話ことばというのが、生活の中にある。そういうところから、この音楽というのを出發させていくという、こういう生活の中から表現するという力を育てていくのが、本当の幼児における音楽教育のあり方なのであります。音楽教育という専門家教育を下におろしていくのはこまるんだという論議があります。私もそれに賛成なのであります。ですから、民謡が大事といっても、近頃テレビでやっているはやりの金沢何とかさんの民謡というのはこっちにあって、あれを目ざして、幼児がっていうのは、これはおかしいのではないかと思うのであります。体育に関しても同じことが言えるのではないかと思うのであります。昨日の晩、ちゃんとうち合わせの相談をしております、私が前、小野清子さんから聞いた話なんです、幼稚園のとび箱っていうのはひくすぎる。ひくすぎると、前につんのめって危険である。もうちょっと1段ぐらい高いぐらいでやっておいた方がいいという話を聞きましてね、私はそれを聞いた時は、なるほどと思ったのです。そのなるほどという話を近藤先生に申しましたら、それがよろしくない。つまり、とび箱をやるどころから、つまり私がいけないと思わなければいけないはずの、ちゃんと体育ではとび箱をやるんだ、そしてだんだん高くとべるのがあたりまえという前提をおいて、それで、それに向かっていくから、とび箱の訓練をするには、というように考えてしまう。その発想がよろしくない。というように近藤先生に教えられまして、「うん」それはそうだったんだというように思いました。で、私、素人だもんですから、そういうようなところ、ふらふらしておりますけれども、出発点は生活ということで、その中で体育を見つけていく。そういう点ではですね、今日、御報告をうかがっていて、非常に楽しかったのは、たとえば、みんなとあまり話のできない、家庭でもあんまり話のできないK子ちゃんだったかな、E子ちゃんだったか子どもがいて、体育など、鉄棒などが非常に上手で、そのうちにその子どもから鉄棒のこつをおそわるということで、発表の機会が与えられる。それで言語生活が豊かになっていく。というような御報告をうかがいまして、やっぱりこれは、体育じゃないんだ。保育なんだと思ったのです。つまり、どのようにでもみられる、つまり、言語生活の発展にとって、ああいう子どもにとって生活を豊かにする機会を与えると、いうことが、何の役に立っているのか、というように見ていけば、これは言語生活の発展ということで見えていけるんじゃないか。で、この私ども外国語がへたなのは、そういう機会が与えられなくて、何かすぐに主語、述語とかです、あるいは主語、動詞、目的語とかそんなようなことばかり習ってたんで、実際に何のために言葉を使うかってことがなかったんですね。つまり、生活がなかったんです。で、近頃はことばの指導でも、受身を教えるとかです、受身の時には「れる」「られる」と

かですね、やってる方もあるんですけど。それが先に立っちゃいけない。受身が必要だったら、受身のことばを使えるような、生活場面を作らなきゃいけない。生活場面を作って、そして教育目標の方は頭のどっかにおいてその目で見えていく、それで成功したか、失敗したかということを見ていくことが大事なんじゃないか。そういう点で、今日の御発表は、まあ、運動中心に御発表なさいましたけれども、全く同じ保育を見ながら、ことば、言語生活の発展でも見ることができんじゃないか。そういうところが、今日の午前中、まあ今日の午前中というのは、確かに運動に偏ってるのはテーマの都合上やむをえないことなんだけれども、ああいう保育が非常にすばらしかった。というところではないかと思うのです。

藤原先生の御質問なさったことに関しまして、このデータを集めるこのグラフのあったところについて、ちょっと私の考えていること2分程お話させていただきますと、実は私は実験群・統制群というふうにわけますので、統制群というのはもし本当に統制群だったら、何も保育をしないグループっていうのをつくらないといけないわけですね。ところが幼稚園に入れておいてこの子どもとこの子どもは何も保育をしないというわけにはいかないわけです。そんな見殺しにするようなことは、どだい無理なんですね。で無理があるからじゃあこちらにはこれをやっておいて、こっちにはこれをやっておこうっていうことになって、あたかもこう分析的に保育をやっているかのようになっちゃったんじゃないか、かように思うんです。じゃあ分けなくて保育の効果を見るときは、どういう方法があるかということなんです、ひとつの方法はですね、例えば学年の始めですね、まあだいたい園で落ち着いた時にお誕生日が来た子どもで調べておく、例えば5歳なら5歳のお誕生日が来た子を中心に調べておく、それからまあ極端な場合、2月頃になりましたら2月に5歳になった子どもを調べておく。そしてある程度人数がそれぞれまとまればその両方の5歳児を比べてみる。すると年齢は同じで一方は保育経験がどうしても多いということになりますね。で、その保育経験が多いことによって、その冬の子どもの方がですね、何かいろいろといいところがあればこれこそ保育の効果という見方ができるんじゃないかと思うんです。で、言いますのはこれが中学校の英語を見てみれば、これは冬の子どもの方が、だんぜん英語ができるようになっている。それはまあ中学校の英語教育の効果だと思うんです。そういう調べ方があり得るんじゃないかと思うんです。全員を調べてしまったあとでも、先程のようにいろんな子どもをあれは抽出児だからちょっと具合が悪いかも知れませんが、もうちょっとまとまった人数の子どもを調べていけば、その年齢を同じにして保育経験が違う子どもっていうのを調べていくことによって調べられるんじゃないかと思います。実は私今年の2月、3月とこの5月6月で、そういう調査をやってみたんです。実は運動はやっていないんです。運動は苦手なのです。あまり大きな声では言えないんですけども、年中組ではたしかに保育効果はあるんです。ずっと伸びているんです。保育を受けた子どもが伸びているんです。ところが少くとも東京あたりのまあ数は多くないんですけども、幼稚園によって出入りはありますけれども、ならしてしまいますと年長組

の方の保育効果はあまりないのですね。あまりないものですから発表するのに困りまして、そんなことはあまり断定的に今の幼稚園は年長組は無駄であるという見だしをつけて新聞にかかれると困りますので、もう少し慎重にしなければならぬと思ひまして、細かくみてみました。幼稚園によっていろいろで、こっちの幼稚園ではこっちがいいというように、いろんな所がある。全体としてはどうも年長組がよくない、やっぱりやりがいのあることをちょっとやらしてないところに問題があるんじゃないかと思っています。こちらの保育を拝見してまして、子ども達がやりがいのあることをやっていると、この位のことやらしてみることが大事じゃないかと思ってるんです。どうも雑然とした話を長々と致しました。紙が廻って参りましたのでこの辺で終りたいと思います。(拍手)

#### 司会(丹羽)

どうもありがとうございました。時間があればもっとお聞きしたいんですけども恐縮です。また時間の関係でまとめることも省略させて頂きまして、あと13~14分でございますので、できたら会場の皆さんから何かこういったことを聞きたいという御質問なりあるいはこうではないかという御意見がございましたら、お受けしたいと思ひますが如何でしょうか。どんなことでも結構ですが。

(問 質問なし)

#### 司会(丹羽)

ないようでしたら先程近藤先生から御指摘のありましたことにつきまして、もう少し詳しく御意見を伺いたしたいと思います。私どもの園でも経験してることですが、子どもにやらせてみればいくらでも上手に、いくらでもは言いすぎですが非常にうまくなるんですね。うまくなるのであれば、やらせればいいのかどうかという問題つまり子どもにやらせれば非常によく発達していく、発達するのであればそれを子どもの教育の内容として取り入れていっていいのかどうか、教育の目標とも関連して出てくるとは思ひますけれども、こういったことに関してもう少し御意見を伺ってみたいと思ひますがいかがでしょうか。

#### 近藤先生

例えばこういうことがあるんです。体力づくりなんかとつながってきますとなわとびが体力づくりに大変よいというので、なわとびを毎日毎日やり、うちの幼稚園の特色は何かというとなわとびだって、そういう幼稚園があるんです。そこで子ども達はとにかく回数をとべればいいのだということになってしまふんじゃないか、そうではなくて、なわとびには、いろんなとび方があるんだということをお学ばせたり、なわとびを1年間するのではなくて、なわとびはもうやめたというんで他の運動に取り組む、そういう形が僕は子ども本来のものではないかと思ひます。それが何かなわとびが子どもにしたがってエスカレートしていくきらいがある。私は子どもを考えますとある時期になりますと何といひますか、幼稚園でもあるんですけども、5歳児がやっているのを4歳児がみているわけですね、それは混合ではない場合です。ある時期になれば4歳児は必ずベークラウトが始まるという時期

があるわけで、年がら年中そこでそればかりやっているのではなく、多くのことをすることによって、結局いろんなことを身につけるといことが子ども本来の姿じゃないかと思うんですね。むしろ何かひとつだけ達成していくってことは、大人の側で何とかやらせるということがあるのではないかと、そういう感じを私は持っています。

#### 司会 (丹羽)

この辺のところが大変難しい問題ではないかと思いますが、私の園でもぶつかった問題ですけども、ある運動をさせていきますと運動の型でいいましても、運動能力でいいましても著しく伸びていく、よく出来るようになる。よくできるようになるから、それじゃどこまでもやらせていいのかわかという問題ですね。子どもはそれに対する結論というものを持っておりませんが、何かそういった時に、教育特に幼児教育とは、どういうことなのか、そういう幼児教育の目的や本質との関連でこういったことを見ていかなければならないのではないかと考えています。時間もありませんのでディスカッションは省略させて頂きまして、もうひとつ先程永野先生からお出し頂きましたことで大変重要なことがございます。まためったにこういう先生方が一堂に会する機会をもつことはできませんので、短い時間ですが、できるだけ御意見もお伺いしたいと思います。すなわち自然に任せておいたら自然的に子ども達が運動するようになるのかどうか運動でなくても他の活動でもかまわないんですが、あるいはある環境を設定した方が、例えば遊具等を準備したり、基礎的な事柄を教えた方が子ども達は自然的に活動するようになるのであろうか、その問題がひとつあるのではないかと思います。私の言い方が舌足らずでおわかりになりにくい点があるかと思いますが、要するに子どもの遊びのままに自然に任せておいた方が子どもは自発的に能動的に活動していくようになるのか、それとも計画的なと言いましょうか、まあこれもいろいろ問題がありましようが、少なくとも大人がこうやせたいということ教えるという意味じゃなしに、子どもの活動をよく見てその活動が展開するよう教える必要があるのかないのか、あるいは教えた方が子どもが自発的に能動的に活動するようになるのかどうか。この問題が大変大きな問題としてあるのではないかと。その例として永野先生から無案保育の状況について、簡単なご紹介を頂きましたけれども、要するに子どもの自然な遊びにまかせておくべきだという非常に強いひとつの流れがある。その遊びについては概念や内容方法をめぐる問題等もございましようが、この辺のことについて御意見をお伺いしたいと思います。藤原先生如何なものでしょうか。

#### 藤原先生

私はやっぱり刺激を与えてやった方がいいと思います。遊びの楽しさというのを子ども達はほうっておいたら、経験をしないで済んでしまうのではないだろうか。しんどいけれどやってみて、できて面白かったとか、そういう楽しさというものは経験できない、だから私達はこんな遊びがあるんだよとか。先程なわの話が出ましたけれども、ちょっとお話がそれるかもわかりませんが、なわではなわ

とびかししないと考え親も先生も何となく発想が貧弱であるそんな感じがするんです。だからなわもふりまわしたらヘリコプターになって子どもが思わず走ってしまう。ひっぱりっこしたら荷物運びができる。さらにいろんなひっぱり方ができるわけですね。2人でひっぱりたり、下をくぐったらトンネルになるとか、まあそういうふういろんな遊び方があるんですけども、なわはなわとびかしがないものなんだと思いこんでいる先生もある。だからそういう中では子どもも、その遊びの面白さを知らないんじゃないかなあと。だから先生がもっと子どもの動きをみて、そして子どもに刺激を与えてやれば、いろんな遊びを自分からつくり出していくような力ができてくるんですね。遊具があってもそれで遊ばない。でもこんな遊び方があるんだよといって先生がグループで指導すれば、それが今度は自由な子どもの遊びの中にひろがっていく。それから仲間と遊んで楽しんだ、仲間とこんな遊びをしたら楽しんだという経験があってこそ、子どもがまたそういうふう発展していくわけですから私はやっぱり先生がよき刺激を与えてやる。子どもからひき出しながら与えてやるそういうふうなひき出し方が、あるいは刺激が大切だと思っています。

#### 司会（丹羽）

そうしますと全く放ったらかしという意味じゃなしに、子どもの姿をよく見てその姿が発展するよ  
うな環境を作ってあげることが必要であると理解してよろしいのでしょうか。

#### 藤原先生

例えばいろんな運動経験をさせていても運動のきらいな子どもがいますね、クラスにひとりかふたりいるわけです。それは仲間がないからというものもありますし、自主的な態度が育ってないからというものもありますけれども、こわいとかしんどいとか、僕はようせんとか、僕したってできないから恥かしいからいやなんだと思っているのもいます。小さい時にうーんと経験をしておけばいいんですが、経験のない子をほうっておけばそういう子はずっとしないわけですね。だからちょっと大きくなって知識だけが発達してきた子どもが、「そんな僕せえへんわ、家へ帰ってしてくるわ」という言葉が出てきたら、これは失敗だと思うんです。だからやはり小さい時にいろんな経験をし、刺激を与えておく必要があると思います。劣等感が育つようになってからいろんなことを刺激として与えても非常に難しくなってきます。それまでにいろんなことを楽しく幅広く先生としては、しておくことが自分から遊べるように育っていくのではないかと思います。

#### 司会（丹羽）

ありがとうございました。他のおふたりの方にもお聞きしたいのですが時間もなくなって参りましたので、最後に、結論は同じではないかと思いますが、近藤先生と永野先生との御意見が多少違ったように見えました遊具の問題についてお伺いしたいと思います。つまり豊かな遊具を多く設定しておいた方が子どもの発達の面からいいことなのかどうなのか、これは恐らく遊具のあり方の問題としまして両先生の御意見は一致するんじゃないかと思いますが、表面的に聞きますと全く違う意見のよう

に思われますので、もう一度その点をお伺いしたいと思いますがいかがでしょうか。

#### 近藤先生

私は教育的意図で遊具ってどうなっているかを考えなくてはならない。例えば今日研究発表会の遊具でこうなっているのは私は大変いい遊具だと見ているわけです。ただし、それは子どもがつくれるか、あるいは子どもがそういう発想をするかと言えばそうじゃない。しかし教師の側から言えば子どもがバランスというものを理解する、気づくとかあるいは他の場面でもほかの生活に非常に興味をもっているとかという時に、それを気づかせたり学ばせたりする道具というものは考えていかねばならないと思っています。そういう意味で遊具というものは考えるべきである。その面で考えると運動の遊具というのはかなり体力的な面を考えた形で遊具を作っちゃう。これがやはり問題だろう。体力だけを問題にするのではなく、むしろ子どもの全体的な発達をおさえた上で用具を考えなければ問題である。子どもの全体的な面から考えれば先程話したように、子どもの側でいろんな問題が出てくるような道具というものはあるはずである。ただそれがたったひとつしかありませんではよくないので、要するに私は子どもは遊具なしでそういう活動なんかを期待すべきじゃないかと。やはり遊具っていうのは考えなくちゃならない。今日永野先生が感心なさったあれ「シーソー玉入れ」は私も感心しております。

#### 司会（丹羽）

永野先生いかがでしょうか。

#### 永野先生

時間もありませんので。近藤先生と違うようにお話したのは、話が面白くなるだろうと思ってのことで、考えていることはそう違っていると思わないですね。むしろ恐らく近藤先生も非常に単純にいろいろなものができる。例えば鉄棒なんていうのはオリンピック選手をみえていますとあれ1本でいろいろなことができる。じゃああれが一番いいかという、これはやっぱり具合が悪いですね。というのはどこが一番まずいかという、鉄棒だけでは、子どもの生活にすぐ入っていかないってことですね。つまり運動種目になってしまうところが強いので、そのためには何か鉄棒を子どもの生活に近づける工夫がやはりいるのではないかと思うんです。それはもう昨日から今日にかけて近藤先生とお話して意見は大体一致しているんです。それから種目、そのなわとびをたくさんという話ですけれど、私はさっき出て来なかったことでもう一つ大切なことは、そういう沢山というのも程度問題ですけれども、ああいうのをみてですね、先生もその子の才能を見なおす、あるいは親ごさん達にもおだてに使ってですね、子どもの力を見直すってことは非常に大事なことだと思うんです。これは別になわとびだけではなくて何でもいから、いいところがあったら親ごさんに伝えてお子さんは立派ですよって。子どもをどこかいいところをみつけるっていいことなんじゃないかと思しますので、それが今度は子どもの成長に戻ってくる。子どもの立派なところをまわりのものが認めたことが子ど

もの成長に戻ってくる。そのサイクルをみる必要があるんじゃないか。ただ能力を測定するだけじゃなくて、教師としてはそういう循環を考えることが必要じゃないかというように考えております。

#### 司会 (丹羽)

ありがとうございました。予定しました4時半を2分程すぎました。列車その他の時間の予定もございましょうから、できるだけのばしたくないと思いますので、只今からまとめさせて頂きたいのですが、すんなりまとまってしまうと、皆さんも忘れてしまう可能性がありますので、いやそんなことはないという不満やもやもやとしたものを持って帰って頂きたいと思います。今の問題といえますか、先程から出ております問題にかかわりあいまして、概して幼児教育、幼稚園教育の基本的な考えは、子どもの側からいろんな活動を発展的に系統的におさえていこう、子どもの活動が発展するような、そういうあり方を考えていこうという傾向が非常に強いと思います。私も本当にそうだろうと思いますが、そういつてしまったんでは石を投げて波紋を起すということにはなりませんので、それに対して一つ疑問を投げかけてみたい。それはどういうことかと申しますと、そういうことだけしていて子どもは本当に将来、社会の荒波の中で生きていくことができるんであろうか、社会的な存在として子どもは生きていかなければいけない。そのところではいろんな社会的制約がありますし、文化的な拘束というものもあるんじゃないか、そういう中でたくましく生きていくためには、子どもにどういう教育をすればいいかということを考えてみますと、文化の伝承 発展ということと、子どもの活動の自発的な発展ということとについて、どこに接点を求めればよいのだろうか。安易に、子どもの活動だけを見て、それを発展させるような系統性を考えるということだけでよいものであろうか。この辺のところはディスカッションに出ませんでしたけれども、多少残しておいて頂きたい。その方がもやもやしたものが残り、本当に子どもの活動を見きわめて、それを発展させるという立場から系統性を主張する人にとっても、あるいはそれに対して反論する側の方にとっても大事じゃないかと考えます。今日は長時間いろいろなお話を頂きまして有難うございました。教育の問題は今日聞いて明日からすぐ役立つというような問題ではないと思います。きわめて重要な課題をたくさん提出して頂き、また、多くの示唆を頂きました講師の先生方、そして遅くまで熱心に討議に御参加下さいました会場の先生方に心から御礼申し上げます。(拍手) 以上。